

大学生の発達と教育改革の課題

—鳥取大学におけるアンケート調査をもとにして—

田丸敏高*

Students' Development and Topics of Educational Reform in Tottori University

TAMARU Toshitaka

キー・ワード：大学生，発達，教育改革

Key Words: Student, Development, Educational Reform

問題と目的

現在，社会状況の変化と学生の学力や意識の変化に応じて，大学教員にも教育の創意工夫が求められている。習得すべき知識はますます専門化しているのに，その習得を支える基礎教養は体系化していない。学生から見れば，一般教養や専門科目を学習するためには基礎的な知識が必要であるのに，自然科学においても，社会・人文科学においても，さまざまな知識の「欠落」がある。それを補い，真に大学に「入門」するためには，高校において学んでおくべき知識を大学で再履修する機会も必要であろう。また，大学に入学するにあたって，学問研究の厳しさを自覚して臨む学生は少なく，反対に「学習嫌い」の傾向も認められる。そのため，「楽しい授業」「わかりやすい授業」など，授業の工夫も必要とされる。じっさい鳥取大学をはじめ他大学においてもさまざまな授業改善の取り組みが試みられている。⁽¹⁾

たしかに，未学習の知識がいきなり与えられたり，資料の提示が不十分だったり，話し方が不適切だったり，板書の字が読めなかったりする点等があれば，改めるのは当然のことではある。しかし，教員の側がさまざまな授業メニューを準備し，教育機器を使ってわかりやすい提示を行ったとしても，当の学生に学ぶ意欲が生まれなければ，むなしい努力に終わってしまう。大学生が何を求めどこへ向かって成長しようとしているのか，すなわち大学生の発達にかみ合った形での授業改善や教育改革がいま求められているのである。

また現在，大学における研究と教育のあり方も問われている。学生のいわゆる「低学力」を前に，教育と研究とを分離して，それぞれを効率的に進めようとする考え方もある。しかし，研究から分離した教育が本当に効率的なのであろうか。また，教育から分離した研究，学生たちの若々しい問

*発達心理学研究室 Department of Developmental Psychology

題意識に触発されないような研究が本当に実りあるものになるのであろうか。こうした問題に対して安易に結論を急ぐのではなく、多様な事実をもとにさまざまな角度からの検討が必要であろう。

ところで、大学とは何か、まず基本に立ち返ってみたい。大学の目的は、学校教育法において次のように示されている。

「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」(学校教育法第52条)

大学は、こうした目的のもとにさまざまな年齢層の人々が学び合い、研究し合う場である。だが実際、学生の多くは18歳から22、3歳の青年である。そのことから、広い知識と深い専門の習得を通じて、人間的にも成長・発達する場として大学は期待されている。大学生を発達の視点からとらえるということは、一方で青年期の発達過程のなかに位置づけることであり、他方で大学固有の発達条件と対応させることである。

思春期および青年期の段階について、ワロンは次のように述べている。

自分のなかに生じている変化を目のあたりにして、青年は神秘を感じ、それゆえに人との社会的な関係のなかで迷いが生じ、明確な決心を行うことが難しくなります。しかし、青年の抱くこの神秘が、同時に知的活動を研ぎ澄ますことにもなります。この前の年齢段階では子どもは実証主義的なレベルにとどまっていたましたが、この時期に入った青年たちは、物や人の存在理由、その起源と運命を見出すことが不可欠のことであるように思うようになります。ここに世界は新しい次元をもつことになるのです。これはたしかに形而上学的な関心ではあります。しかし、この形而上学的な関心は、適当なこやしと導きを与えれば、原因を深くたどっていく科学的関心となり、また家族あるいは社会的な責任への関心となりうるのです。ここでもまた、懐疑の精神と、構築や発明、発見、冒険、創造の精神とが交互に現われ、また結び合って現れてくるのです。⁽²⁾

現代の青年は、一方で性的な早熟を中心とした心身の「発育加速」を指摘され、他方で「低学力」や「ジコチュウ」という言葉に象徴されるような認識発達や人格発達の未熟を指摘されている。しかし、こうした両極端への揺れ動きこそ、ワロンのいう青年の両価性の現代的特徴かもしれない。

いまや、大学は大衆化し、短大も含めれば約半数の人々が通うところとなっている。大学生の社会的地位は時代とともに変化し、近未来の知識人やエリートとして尊敬されていた時代から、たんなる高校生の延長であり未熟な者として扱われる時代、そして、他方で安価な労働力として重宝される時代へ変わっている。こうした大学生に対する「世間の目」は、大学生の発達に影響を及ぼす。同時に、大学が大学として存在している以上、青年が発達できる条件ないし機会を大学はもっている。

- ①一般教養科目などの履修などにより、専門的・学問的知識を通して社会的視野を広げること
- ②専門的知識や技能の習得により、専門的視野をもつと同時にそれを担える人間としても成長すること
- ③研究室における研究活動に参加することにより、教員や先輩と問題意識を共有しながら、専門家集団の一員として成長すること
- ④大学の文化のなかで触発され、読んだ本や出会った人から、学び成長していくこと

こうした機会を大学生の視点から捉え直してみると、当面大学を4つの「出会い」の場として想定することができる。それは、①学問との出会い、②社会との出会い、③人との出会い、④自分との出会い、である。このような想定のもと、本研究では、質問紙を用いて大学生の意識調査を行うこととする。その資料をもとに、大学生の発達にかみ合った教育改革のあり方をさぐり、青年としての大学生の発達とその支援の可能性を追求したい。そのことを通じて、大学における研究と教育の有機的結合の可能性を探っていきたい。

方法

【調査対象】 鳥取大学教育地域科学部1, 2年生および教育学部3, 4年生。また、補足資料として工学部および農学部1年生。有効回答の学年別の内訳は、表1の通りである。

【調査年月】 2001年2月

【調査方法】 授業等を通じて、無記名によるアンケートを配布し、その場で回収するか、後で指定のボックスに入れてもらう。

表1. 分析対象となる回答者数

		教育	工	農
平成12年度入学	1年	73	64	45
平成11年度入学	2年	80		
平成10年度入学	3年	57		
平成9年度入学	4年	58		
合計		268	64	45

人

結果と考察

I. 授業に対する姿勢および態度について

ここでは、1週間に受講しているすべての授業について「受講している主な理由は何ですか?」と質問した。そして、それぞれの授業を受講する主な理由を(a)～(g)の7つの選択肢から1つ選んでもらうこととした。

授業を受講する主な理由の選択肢は以下の通りである。

- (a) とりあえず単位がとれればいい。
- (b) 教養を身につけたいから。
- (c) 専門的な知識を習得するため。
- (d) 友だちも受講しているから。
- (e) なんとなく、のぞいてみたかったから。

表2. 授業に対する姿勢および態度 (教育：学年別)

		1年	2年	3年	4年
タイプ	a とりあえず単位がとれればいい。	26.4	25.6	16.1	24.1
	b 教養を身につけたいから。	4.2	1.3	3.6	10.3
	c 専門的な知識を習得するため。	16.7	23.1	26.8	10.3
	d 友だちも受講しているから。	0.0	0.0	0.0	0.0
	e なんとなく、のぞいてみたかったから。	0.0	0.0	0.0	3.5
	f 資格を取るために必要だから。	9.7	25.6	37.5	31.0
	g その他	2.8	0.0	0.0	0.0
* 混合	40.3	24.4	16.1	20.7	

%

表3. 授業に対する姿勢および態度（1年：学部別）

		教育	工	農	
タイプ	a	とりあえず単位がとれればいい。	26.4	41.7	16.3
	b	教養を身につけたいから。	4.2	13.3	23.3
	c	専門的な知識を習得するため。	16.7	16.7	7.0
	d	友だちも受講しているから。	0.0	0.0	0.0
	e	なんとなく、のぞいてみたかったから。	0.0	0.0	0.0
	f	資格を取るために必要だから。	9.7	0.0	0.0
	g	その他	2.8	0.0	2.3
	*	混合	40.3	28.3	51.2

%

(f) 資格を取るために必要だから。

(g) その他

まず、個々の回答者が1週間で受講している授業のうちある1つの受講理由が全授業数の5割をこえる場合とそうでない場合とに分類した。さらに、(a)の受講理由が全受講数の5割をこえるときを『タイプa』とし、以下同様に『タイプb』『タイプc』『タイプd』『タイプe』『タイプf』『タイプg』と分類した。また、どの受講理由とも全授業数の5割をこえない場合は『混合タイプ』とした。

教育地域科学部および教育学部（以下、教育学部と略す）について学年別に受講理由のタイプを分類して、その割合を示すと表2のようになった。また、1年について学部別に受講理由のタイプを分類すると表3のようになった。

教育学部について回答比率の最も高い受講理由を学年別にあげると、1年では『混合タイプ』が40.3%、2年では「とりあえず単位がとれればいい」という『タイプa』と「資格をとるために必要だから」という『タイプf』が同率で25.6%、3年では『タイプf』が37.5%、4年でも『タイプf』が31.0%であった。（表2）

1年について学部別に回答比率の最も高い受講理由をあげると、教育学部では『混合タイプ』が40.3%、農学部でも『混合タイプ』が51.2%であるのに対し、工学部では「とりあえず単位がとれればいい」という『タイプa』が41.7%であった。（表3）

II. 社会的責任について

ここでは「次のことは『大学生の社会的責任』として大切だと思いますか?」という質問をおこない、各質問項目について「大切である・どちらとも言えない・大切でない」から1つを選んでもらうこととした。結果では「大切である」と回答した比率を取り上げた。表4は、質問項目および教育学部において「大切である」とした回答比率を学年別に示したものである。

学部全体の回答比率を示すと図1のようになった。質問紙に『大学生の社会的責任』と強調しているにも関わらず「h：授業中のケータイはマナーモードにする」「g：ゴミを決められた場所以外のところに捨てない」といったような常識的なルールについて、大学生の社会的責任として「大切である」と回答する比率が95%をこえた。しかし「c：授業や研究において自らの意見を述べる」というような大学生の権利について「大切である」と回答する比率も88.6%と高率である。（図1）

「a：調査や研究で得た秘密は守る」「b：大学のあり方について意見をもつ」「c：授業や研究において自らの意見を述べる」「d：学習上必要な本や辞書は買う」「e：在学期間の見通しをもつ

表4. 「大学生の社会的責任」として大切だと思いますか？

質問項目	1年	2年	3年	4年	教育全体
a：調査や研究で得た秘密は守る。	73.6	74.0	83.9	82.8	77.9
b：大学のあり方について意見をもつ。	83.1	64.9	69.6	60.3	69.8
c：授業や研究において自らの意見を述べる。	93.1	90.9	87.5	81.0	88.6
d：学習上必要な本や辞書は買う。	72.2	67.9	73.2	56.9	67.8
e：在学期間の見通しをもって計画的に学習する。	75.0	69.2	75.0	74.1	73.1
f：先生には礼儀正しくする。	81.7	78.2	87.5	93.1	84.4
g：ゴミを決められた場所以外のところに捨てない。	97.2	93.5	98.2	98.3	96.6
h：ケイタイは授業中にはマナーモードにする。	98.6	98.7	94.6	100.0	98.1
i：飲酒で他人に迷惑をかけない。	88.9	84.6	83.9	86.2	86.0
j：自分の健康管理をする。	91.7	91.0	85.7	78.9	87.5
k：個人的な理由を優先させて授業を欠席することはしない。	23.9	28.2	28.6	37.9	29.3
l：部室や研究室はきれいにつかう。	95.8	85.9	85.7	87.9	89.0
m：友だちからメールがきたら即座に返信する。	11.1	14.1	19.6	27.6	17.4
n：政治や経済の動向について新聞を読んだり、ニュースを見る。	72.2	67.9	83.9	48.3	68.2
o：大学生らしい服装をする。	13.9	14.1	23.2	19.3	17.1
p：大学で学んだ専門を生かした職業につく。	20.8	12.8	14.3	10.3	14.8

* 質問項目に「大切である」と回答した割合 %

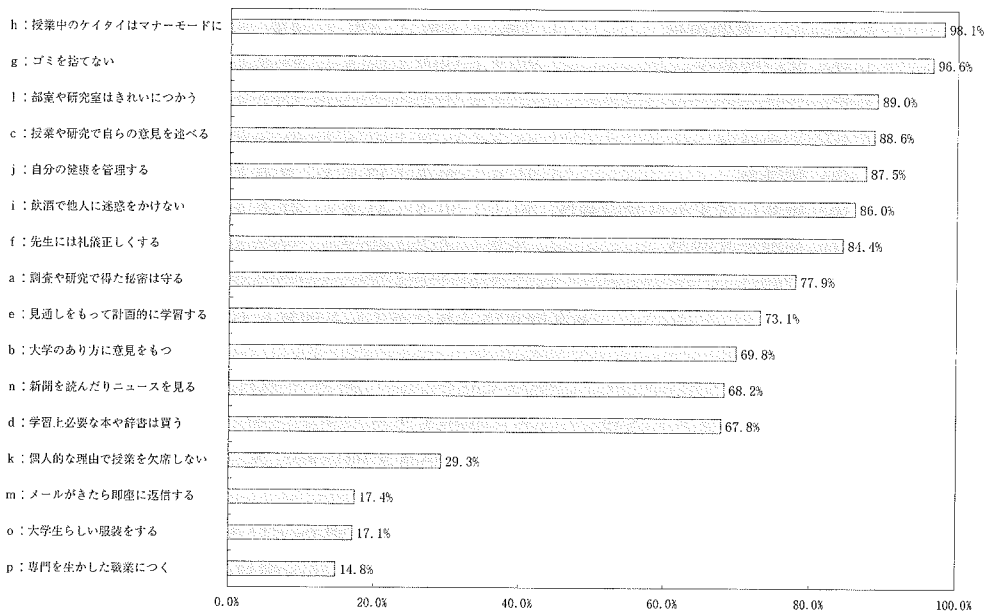


図1 大学生の社会的責任

て計画的に学習する」といった『大学生の社会的責任』と捉えられる項目について学年別に回答比率をみると、どの学年においても6割をこえる回答者が「大切である」としている。(表4)

Ⅲ. 大学で身につけたいこと・身につくこと

ここでは「あなたが大学で身につけたいことは何ですか？」／「あなたが大学で実際に身につくと思うことは何ですか？」という質問をおこない、各質問項目について「身につけたい・どちらと

も言えない・身につけなくてもよい」／「身につく・どちらとも言えない・身につかない」からそれぞれ1つを選んでもらうこととした。結果では「身につけたい」「身につく」と回答した比率を取り上げた。質問項目は表5および表6に示す通りである。

表5. 大学で「身につけたいこと」は何ですか？

質問項目	1年	2年	3年	4年	教育全体
(1) 専門的能力	93.2	96.2	93.0	82.5	91.7
(2) 体力	26.0	21.5	12.3	26.3	21.8
(3) 礼儀作法	57.5	48.1	66.7	54.4	56.0
(4) 人間関係	94.5	81.8	92.9	84.2	88.2
(5) 語学力	76.7	81.0	75.4	57.1	73.6
(6) 職業に対する自分の適性	86.3	83.5	80.7	80.7	83.1
(7) 知的な雰囲気	27.4	40.5	40.4	31.6	35.0
(8) 組織力	68.5	70.9	59.6	66.1	66.8
(9) 一般教養	79.5	78.5	84.2	77.2	79.7

*各学年で「身につけたい」と回答した割合 %

表6. 大学で「実際に身につく」と思うことは何ですか？

質問項目	1年	2年	3年	4年	教育全体
(1) 専門的能力	69.9	75.6	70.2	44.8	66.2
(2) 体力	6.8	10.3	5.3	6.9	7.5
(3) 礼儀作法	15.1	19.2	28.1	27.6	21.8
(4) 人間関係	66.7	61.5	62.5	56.9	62.1
(5) 語学力	21.9	29.5	17.5	7.0	20.0
(6) 職業に対する自分の適性	30.1	30.8	31.6	27.6	30.1
(7) 知的な雰囲気	6.8	9.0	10.5	8.6	8.6
(8) 組織力	42.5	40.3	31.6	32.8	37.4
(9) 一般教養	38.4	28.2	35.1	17.2	30.1

*各学年で「身につく」と回答した割合 %

なお、「人間関係」については「お互いに批判し合えたり、必要な場合には距離をおきながら人とつきあえる力」、「組織力」については「みんなの意見をまとめながら研究や課題をやり遂げる力」という注釈を質問紙に加えている。表5および表6は教育学部において「身につけたい」「身につく」とする回答比率を学年別に示したものである。

学部全体の回答比率を示すと図2のようになった。大学生が身につけるべき「専門的能力」「人間関係」「職業に対する自分の適性」「一般教養」「語学力」といった項目で7割をこえる回答者が「身につけたい」と回答している。一方、「実際に身につくと思うこと」についても「専門的能力」で66.2%、「人間関係」で62.1%の回答者が「身につく」と回答しており、「職業に対する自分の適性」「一般教養」「組織力」についても30%をこえる回答者が「身につく」と回答している。(図2)

「専門的能力」についてみると、4年の82.5%が「身につけたい」と回答しており、「実際に身につく」と回答している4年は44.8%であることから、専門的能力を身につけたいと思いながら4年間の大学生活を終える学生もいることが予想される。学問に関わる項目についてみると「専門的能力」「職業に対する自分の適性」「一般教養」などはどの学年でも「身につけたい」と回答する比率が6割をこえており、学問に対する学生の意識の高さを示すものと考えられる(表5)。さらに「専門的能力」については、4年をのぞけば7割以上の回答者が「実際に身につく」と回答している(表

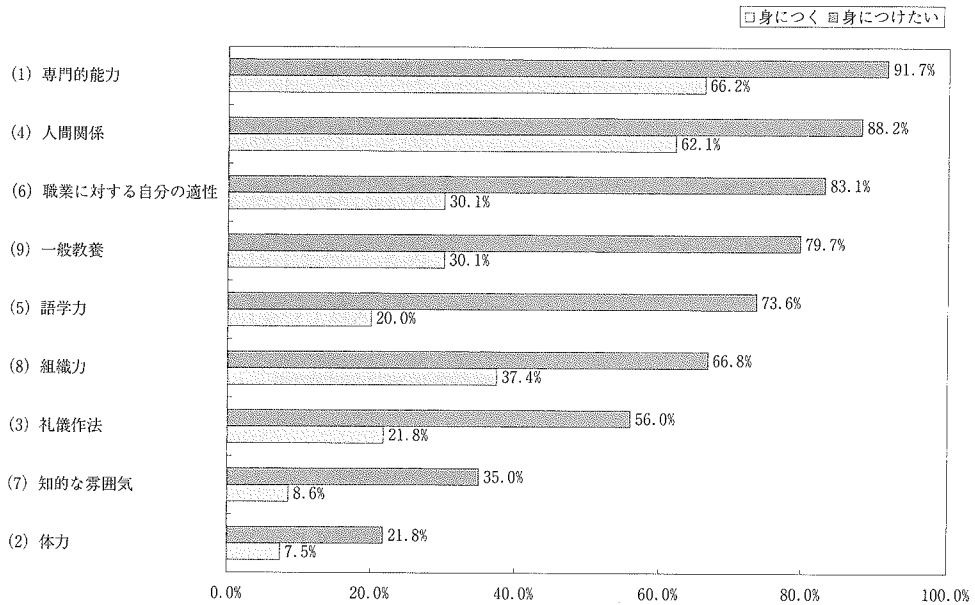


図2 大学で身につけたいこと・身につくこと

6)。

IV. 大学教員との関わりについて

1. 大学教員との関わり方

ここでは「あなたが次のように関わっている大学の教員はどのくらいいますか？」という質問をおこない、各質問項目について「0人・1人・2～3人・5人以上」から1つ選んでもらうこととした。回答は、まず「0人」と「1人・2～3人・5人以上」に分類し、それぞれ「いない」「1人以上いる」とした。結果では各質問項目について、そのような関わり方をしている大学教員が「1人以上いる」と回答した比率を取り上げた。表7は、質問項目および教育学部において「1人以上いる」とする回答比率を学年別に示したものである。

学部全体の回答比率を示すと図3のようになった。「積極的に話をするように心がけている」「研究室に本を借りに行く」「専門について聞きに行く」「書いた論文を読もうと思う」というような学問的な関わり方をしている教員が「1人以上いる」と回答した回答者は5割をこえている。(図3)

大学教員との関わり方については、どの項目とも学年があがるにつれて関わっている教員が「1人以上いる」と回答している比率が高くなり、学問的な関わり方だけでなく、「悩みが相談できる」というような項目についても1年では17.8%が「1人以上いる」と回答しているのに対し、4年では53.4%が「1人以上いる」と回答している(表7)。

表7. 関わっている教員がいますか？

	1年	2年	3年	4年	教育全体
積極的に話をするよう心がけている	46.6	61.3	70.2	77.6	62.7
研究室に本を借りに行く	37.0	41.3	64.9	84.5	54.5
専門について聞きに行く	34.2	43.8	68.4	75.9	53.4
書いた論文を読もうと思う	50.7	41.3	52.6	69.0	52.2
悩みが相談できる	17.8	33.8	38.6	53.4	34.7
調査があるとき参加させてもらっている	16.4	18.8	33.3	34.5	24.6
特に用事はなくても研究室に行く	6.8	18.8	35.1	41.4	23.9

*各学年で「1人以上いる」と回答した割合 %

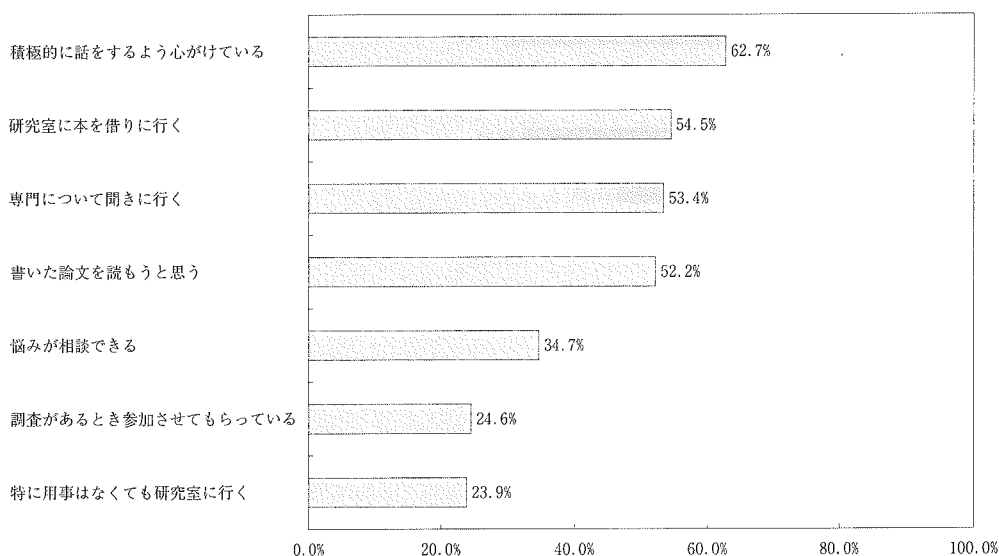


図3 大学教員との関わり方

2. コースの先生と関わる時大切にしたいこと

ここでは「自分の所属している専修またはコースの先生と関わる時、あなたが大切にしたいことは何ですか？」という質問をおこない、各質問項目について「大切にしたい・どちらとも言えない・大切ではない」から1つ選んでもらうこととした。結果では「大切にしたい」とする回答を取り上げた。表8は、質問項目および教育学部において「大切にしたい」とする回答比率を学年別に示したものである。

学部全体の回答比率を示すと図4のようになった。「a：礼儀正しくすること」について「大切にしたい」と回答した比率は88.7%であるが、「k：専門について聞きに行く」という学問的な関わり方について「大切にしたい」と回答した比率も82.6%と高率である(図4)。また、両者とも全学年を通じて高率である(表8)。

1年から4年にかけて「大切にしたい」とする回答率が増えるのは、「b：積極的に話をするよう心がける」「c：愛想をよくする」であり、1年から3年にかけて「大切にしたい」とする回答率が増えるのは、「i：本を借りに行く」であった(表8)。

表8. 大学教員と関わる時大切にしたいことは何ですか？

	1年	2年	3年	4年	教育全体
a：礼儀正しくすること	86.3	83.3	96.5	91.4	88.7
b：積極的に話をするよう心がけること	50.7	64.1	77.2	77.6	66.2
c：愛想よくすること	32.9	39.7	43.9	56.9	42.5
d：気をつかうこと	52.1	48.7	54.4	62.1	53.8
e：単位をくれる程度に近づくこと	6.8	11.5	5.3	5.2	7.5
f：相手にしないこと	2.8	3.9	1.8	1.8	2.7
g：悩みを相談すること	13.7	23.1	26.8	22.4	21.1
h：先生の書いた論文を読むこと	46.6	47.4	44.6	39.7	44.9
i：本を借りに行くこと	31.5	52.6	67.9	46.6	48.7
j：研究室にたびたび行くこと	38.4	43.6	39.3	41.4	40.8
k：専門について聞きに行くこと	76.7	87.2	85.7	81.0	82.6
l：調査があるとき参加させてもらうこと	41.1	52.6	52.6	46.6	48.1

*各学年で「大切にしたい」と回答した割合 %

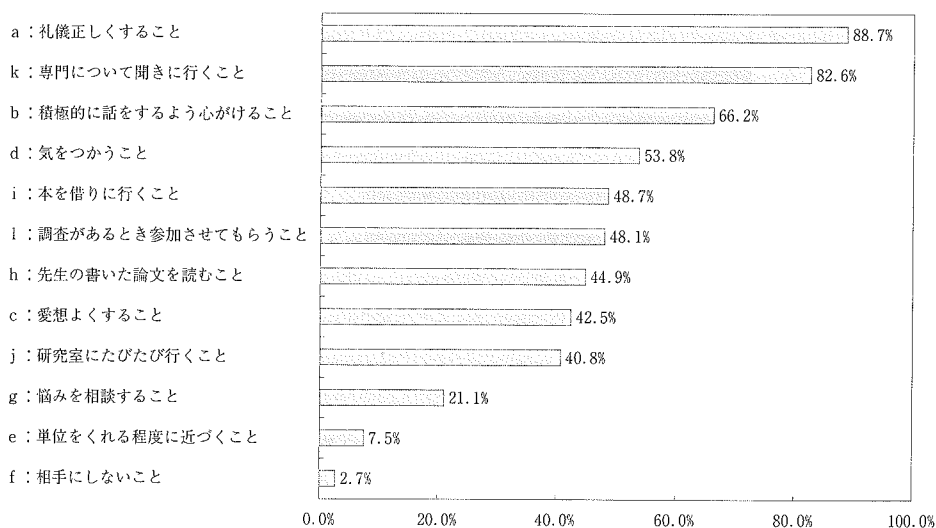


図4 大学教員との関わりで大切にしたいこと

3. 大学の教員から求められていること

ここでは「あなたは、大学教員から何を求められていると思いますか?」という質問をおこない、各質問項目について「求められている・どちらとも言えない・求められていない」から1つ選んでもらうこととした。結果では「求められている」とする回答を取り上げた。表9は、質問項目および教育学部において「大切にしたい」とする回答比率を学年別に示したものである。

学部全体の回答比率を示すと図5のようになった。「c：自分の考えをもつ」「d：授業に対する疑問や意見を言う」など授業に対する積極的な態度、「b：礼儀正しい態度をとる」「h：私語をしない」「g：遅刻をしない」などのモラルについて、「求められている」とする回答が80%を越えた。また、1年から4年にかけて「求められている」とする回答率が増えるのは、「e：授業中紹介した文献は読む」「i：素直である」であった(表9)。

表9. 大学教員から何を求められていると思いますか？

	1年	2年	3年	4年	教育全体
a：大学生らしい服装をすること	9.6	23.1	29.8	17.2	19.5
b：礼儀正しい態度をとること	79.5	82.1	91.2	81.0	83.1
c：自分の考えをもつこと	98.6	97.4	98.2	93.1	97.0
d：授業に対する疑問や意見をはっきり言うこと	89.0	88.3	86.0	82.8	86.8
e：授業中紹介した文献は読むこと	47.9	51.3	56.1	56.9	52.6
f：専門の辞書をいつも持ち歩くこと	26.0	19.2	12.3	20.7	19.9
g：遅刻をしないこと	79.5	79.5	82.5	79.3	80.1
h：私語をしないこと	83.6	75.6	87.7	84.5	82.3
i：素直であること	43.8	50.6	58.9	62.1	53.0

*各学年で「求められている」と回答した割合 %

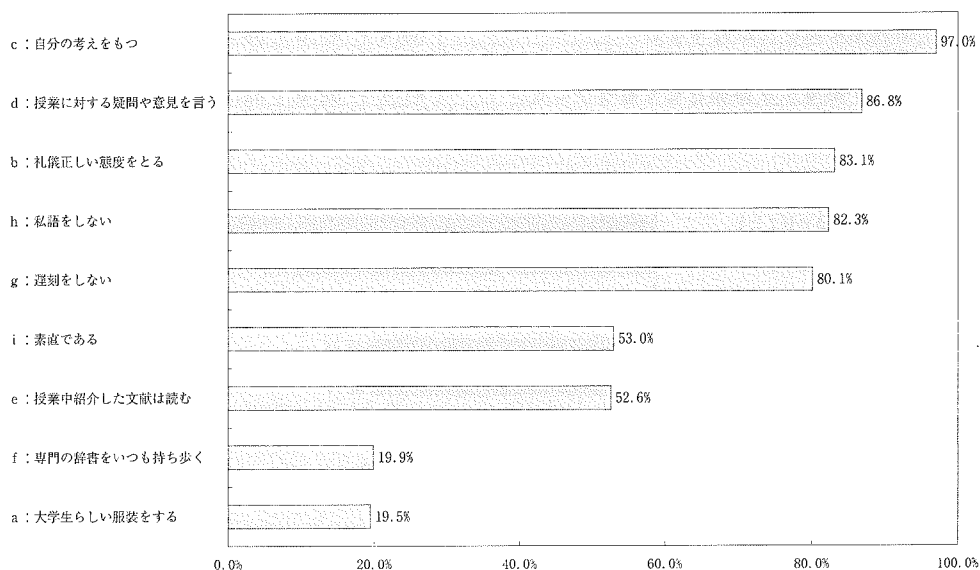


図5 大学教員から求められていること

V. 自分について

1. 人間関係に関わる自己コントロール

ここでは「次のようなとき、あなたならどうしますか？」という質問をおこない、各質問項目について①～③の中から1つ選んでもらうこととした。

- ①は自分の気持ちのままに葛藤を避ける回答であり、
- ②は自分の気持ちを乗り越えて結果を出そうとする回答であり、
- ③はその他の回答である。

表10～13は、教育学部における学年別の回答について、質問項目ごとに示したものである。

(1) 気の合わない人と協力してレポートを書かなければいけないとき

教育全体では、「①なるべく話し合いを避ける」という回答が4.2%であり、「②必要な協力はしてレポートを仕上げる」という回答が92.0%であった。(表10)

(2) ゼミの先生に気に入られていないと感じたとき

教育全体では、「①ゼミに出るのをやめる」という回答が10.3%であり、「②努力してゼミに出る」という回答が69.5%であった。学年別にみても①の回答が1, 2年で10%以上みられるのが特

徹的であった。(表11)

(3) 意見を言いたいんだけど言いにくいとき

教育全体では、「①意見を言うのをあきらめる」という回答が42.7%であり、「②うまく言えなくても言ってみる」という回答が50.8%であった。2年においては①の「あきらめる」とする回答が5割を越えているように、意見を言おうとする学生とあきらめる学生とが拮抗状況にあることがわかる。(表12)

(4) 授業に出たくない気分するとき

教育全体では、「①自分の気分を優先して、授業には出ない」という回答が31.6%であり、「②がんばって、授業には出る」という回答が52.9%であった。②の「授業には出る」という回答が5割程度にとどまっているところが特徴的である。(表13)

表10. 気の合わない人と協力してレポートを書くとき

	1年	2年	3年	4年	教育全体
①なるべく話し合いを避ける	6.8	2.6	1.8	5.3	4.2
②必要な協力はしてレポートをしあげる	89.0	96.2	92.9	89.5	92.0
③その他	4.1	1.3	5.4	5.3	3.8

%

表11. ゼミの先生に気に入られていないと感じたとき

	1年	2年	3年	4年	教育全体
①ゼミに出るのをやめる	12.3	15.4	5.4	5.5	10.3
②努力してゼミに出る	74.0	56.4	73.2	78.2	69.5
③その他	13.7	28.2	21.4	16.4	20.2

%

表12. 意見を言いたいんだけど言いにくいとき

	1年	2年	3年	4年	教育全体
①意見を言うのをあきらめる	35.6	51.3	41.1	41.8	42.7
②うまく言えなくても言ってみる	56.2	42.3	51.8	54.5	50.8
③その他	8.2	6.4	7.1	3.6	6.5

%

表13. 授業に出たくない気分するとき

	1年	2年	3年	4年	教育全体
①自分の気分を優先させて授業には出ない	34.2	33.3	16.4	40.4	31.6
②がんばって授業には出る	52.1	52.6	65.5	42.1	52.9
③その他	13.7	14.1	18.2	17.5	15.6

%

2. 努力

ここでは「次のことがらについて、努力していますか?」という質問をおこない、各質問項目について「とても努力している・少し努力している・努力していない」から1つを選んでもらうこととした。結果では「とても努力している」とする回答を取り上げることとする。表14は、質問項目および教育学部において「とても努力している」とする回答比率を学年別に示したものである。明確な学年的な傾向は認められない。

学部全体の回答比率を示すと図6のようになった。「とても努力している」という比率が高い順にあげると、「自分を成長させるために」40.4%、「お金を貯めるために」30.8%、「将来の夢をかなえるために」27.3%、「専門的知識を獲得するために」26.5%であった。(図6)

表14. あなたは努力していますか？

	1年	2年	3年	4年	教育全体
(1) 性格を変えるために	14.1	15.4	5.4	12.5	12.3
(2) 語学力をのばすために	4.2	7.7	7.1	5.3	6.1
(3) 社会的視野を広げるために	22.5	14.1	14.3	12.3	16.0
(4) 専門的知識を獲得するために	28.6	20.5	30.4	28.6	26.5
(5) 家族関係を改善するために	11.4	11.8	14.3	9.3	11.7
(6) 友人関係を変えるために	14.3	11.5	21.4	10.9	14.3
(7) 容姿を魅力的にするために	25.4	15.6	14.3	19.6	18.8
(8) 将来の夢をかなえるために	25.4	17.9	41.1	29.1	27.3
(9) 恋愛関係を変えるために	22.9	26.9	17.9	21.8	22.8
(10) お金を貯めるために	39.4	23.1	28.6	32.7	30.8
(11) 教養を身につけるために	23.9	10.3	19.6	19.6	18.0
(12) 自分を成長させるために	43.7	34.6	43.6	41.1	40.4

*各学年で「努力している」と回答した割合 %

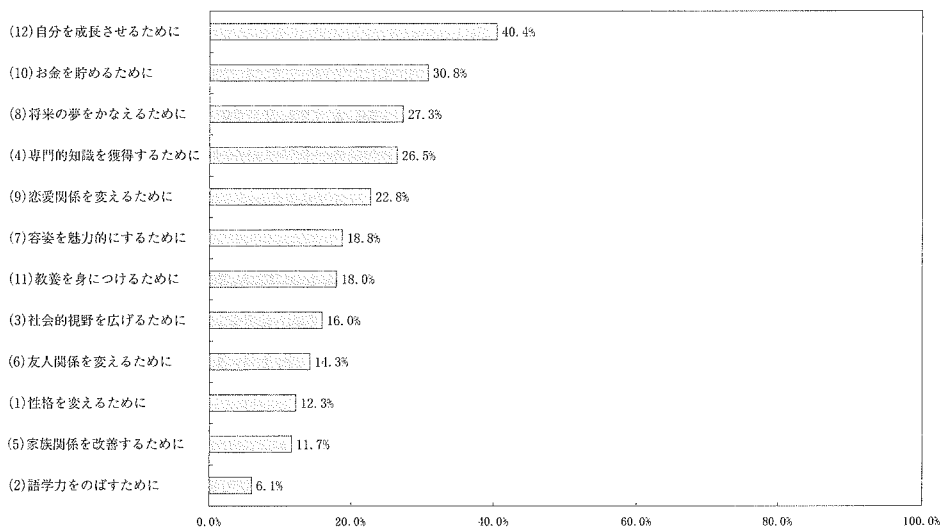


図6 努力していますか？

3. 変わりたい

ここでは「あなたは自分が変わりたいと思ったことはありますか？」という質問をおこない、「ある・ない」から1つ選んでもらうこととした。表15は、は教育学部において「ある」とする回答比率を学年別に示したものである。明確な学年的な傾向は認められないが、全体として8割程度の学生が「自分が変わりたい」と思ったことがあると回答している。

表15. 自分が変わりたいと思ったことはありますか？

	1年	2年	3年	4年	教育全体
ある	80.0	81.3	80.4	74.5	79.3
ない	20.0	18.7	19.6	25.5	20.7

%

全体討論

脳の成熟に伴って心理諸機能も発達する子ども期とは異なり、18歳を越えた青年が自らの認識を発達させたり、人格を発達させたりするためには、それにふさわしい条件や努力が必要になる。大学は、そうした条件を備えた場の1つである。大学には研究や学習を可能にする環境がある。図書館もあれば研究室もある。講義を受けることもできれば、ゼミ活動に参加することもできる。サークルや部活動などに積極的に取り組むことができるし、ボランティアやアルバイトなどを通じて実社会とつながることもできる。全国から集まってきた学生同士いろいろな交流ができるし、さまざまな専門の教員と語り合うこともできる。そして、大学生には時間が与えられているし、何よりも自由がある。

しかし、現在大学生がそうした条件を生かして、勉学の上でも人間的にも成長しえているとは言いきれない。「レジャーとアルバイトに奔走する大学生」、「授業についていけない低学力の大学生」、「何もせず授業にも出ず考えることもなく時を過ごすモラトリアムの大学生」…大学生に対するこうした言い方をたんなる罵詈雑言として退けられない状況がある。大学生の現実を前に、大学では教育改革が進められているが、それが実を結ぶためにはいったい何が必要なのだろうか。

今回の調査は、鳥取大学とりわけ教育地域科学部および教育学部の学生を対象に行ったものであるが、いくつか特徴的なことが明らかになった。第1に、授業に対する姿勢・態度についてである。「大学生は資格をほしがっている」と言われることがあるが、むしろ「専門的知識を習得したい」や「教養を身につけたい」などの受講態度が混在していることがわかった。このことはとりわけ1年生について特徴的である。また、かなりの割合で「とりあえず単位がとれればいい」という受講理由の科目があるということ、とくに工学部の学生の受講理由の4割強がそうであったことは、今後検討を有する課題である。

第2に、大学生の社会的責任についてである。この回答には学年的な傾向は見られないものの、ケイタイの使い方やゴミの扱い方などの一般常識に加えて、大学生固有の社会的責任についても「大切である」との回答が7割～8割の高率を示している。「授業や研究で自らの意見を述べる」「調査や研究で得た秘密は守る」「見通しをもって計画的に学習する」「大学のあり方に意見をもつ」「学習上必要な本や辞書は買う」など、実行しているかどうかは別にしても自覚はしていることがわかった。

第3に、大学で身につけたいこと・身につくことについてである。「身につけたい」という回答率が高いものは、大きく3つの種類に分けることができる。1つは、専門的知識や職業的適性であり、2つは、一般教養や語学力であり、3つは、人間関係や組織力である。この3種類とも将来の職業生活において必要なものであり、また大学で身につけることが可能なものでもある。これらの要求は大学生として正当であり、鳥取大学における教育改革を考える上でも実現すべきものであると言える。これに対して、「身につく」という回答は、専門的能力や人間関係が全体として6割を

越えているものの、他の項目については低い回答率となっている。また、4年では専門的能力（4割）も職業的適性（3割）も他学年に比べて低い回答率となっている。このことは、実社会に出るにあたって、実際に身についたことに自信を持ってないでいる学生が数多く存在することを示唆している。

第4に、大学教員との関わりについてである。1、2年に比べて、3、4年になると関わりのある教員が増えることは当然であるが、3年以上では「本を借りに行く」や「専門について聞きに行く」教員がいる学生が7割にのぼるということは、教員と学生とが密接な関係を築けるという教育学部の特徴を示している。しかし、他方では、4年でも調査活動への参加が3割程度にとどまっているなど、研究と教育との結合という点からすると不十分な点も浮かび上がってくる。

第5に、自己コントロールについてである。大学の授業とりわけゼミにおいては、好きか嫌いかといった感情を乗り越えて課題に取り組む必要があるし、そのことを通じて大学生にふさわしい知的な発達も実現できる。しかし、レポートを仕上げるための学生同士の協力はできても、気持ちをコントロールして「意見を言う」や「授業に出る」に関しては5割程度にとどまっている。とりわけ、1、2年において「意見を言うのをあきらめる」「授業には出ない」という学生が3割～5割見られることは、たんなる授業方法の改善にとどまらず、学生の発達支援のために今後検討押すべき課題である。

第6に、「自分を成長させるためにとても努力している」と回答する学生が4割を超えること、「自分が変わりたい」と思ったことがある学生が8割程度いることなど、今後の大学の教育改革への期待は大きいものと考えられる。

文献

- (1)教授方法研究会（代表 道上正規）編 わかりやすい授業をめざして 鳥取大学 2000
- (2)ワロン，H 浜田寿美男（訳）子どもにおけるパーソナリティの発達段階 『身体・自我・社会』1983所収

付記

本研究は、鳥取大学における平成12年度教育改善推進費（学長裁量経費）による研究プロジェクト「学生の成長過程を見通した教授法開発と心理的支援の課題」（代表 田丸敏高）の一部として、一盛真氏とともに行われました。また、アンケート調査は、2000年度発達心理学特論に参加した学生のアイデアと協力によって実施されました。さらに、資料の分析にあたっては、井戸垣直美さんと松本豪晃さんの協力を得ました。ここに、感謝申し上げます。

(2001年4月25日受理)